

# マンドラとは何か

## 目次

- 一、マンドラの本質
- 二、マンドラの歴史
- 三、日本におけるマンドラ
- 四、マンドラと儀礼
- 五、マンドラの生成と消滅
- 六、マンドラの本質

立川武蔵

## 一、マンダラの本質

マンダラ（曼荼羅、曼陀羅）とは何か。この問いに対して「マンダラはこのようなものだ」と簡単に答えることは極めて難しい。というのは、マンダラはすでに千五百年以上にわたる歴史を有しており、その歴史の中でマンダラの形態や機能は大きく変化してきたからだ。インドで生まれたマンダラは、ネパール、チベット、中国さらには日本などに伝えられた。マンダラが伝えられたそれぞれの地域においてマンダラはさまざまな形態で描かれるとともに、地域ごとに異なった機能を果たしてきた。

「マンダラとは何か。一口でいってほしい」と多くの人がいう。だが、マンダラを一口で定義することはほとんど不可能なのである。マンダラに関心のある人々がそれぞれの立場でマンダラを自分なりに定義し、その定義に従って宗教実践、造型活動、心理療法などにおいてマンダラを用いてきた。結局はそうでしかあり得ないのであり、わたし自身もわたしの定義に従ってマンダラに関わろうと思っている。

だが、千五百年の歴史の中で「マンダラ」という語が用いられ、マンダラらしき図形が用いられてきたのであるゆえに、マンダラは変わらない本質とも呼ぶべきものを保ってきたと考えざるを得ない。時代や地域の差を超えた普遍的な何ものかをマンダラは保持してきたはずなのである。

## 二、マンダラの歴史

歴史的にマンダラがどのように変化してきたのかを簡単に見てみよう。マンダラの原初的形態ができあがったのは五世紀頃であったと思われる。当時は携帯用の祭壇ともいえるべきもので、盆の上に小さな仏像、供物容器などが並べられていたのであろう。このような形のマンダラは、仏に対する供養（プージャ）を行う際の祭壇であって、後世のマンダラのように世界の図としての意味は持っていなかったと考えられる。また後世はマンダラが瞑想の対象になったのであるが、この原初のマンダラはそのようにも用いられていなかったであらう。

七世紀頃の編纂と推定される密教経典『大日経』では特に第二章にマンダラの描き方が詳しく述べられている。この第二章に述べられるマンダラは、師が弟子を入門させる儀礼に用いたものであり、師と弟子の二人が一週間をかけて、地面に描くものである。人気のない場所を選定し、石や骨のかげらなどを取り除く。土地神への供養、弟子自身の身の浄めなどをした後、二人は牛糞を塗って浄められた地面に墨打ちをするという。重要なことは、『大日経』第二章の述べるマンダラは四角であることだ。もっとも中心の仏たちがいる部分は円によって囲まれているが、マンダラ全体の形は四角形であって、今日われわれが見ることのできるチベットやネパールのように周縁が丸く、その中に四角形の宮殿があるわけではない。

この『大日経』に述べられる胎藏マンダラを空海が唐から請来した。もっとも空海が持ち帰ったものは中国的解釈を加えたものであって、インドで生まれた経典『大日経』に述べられた通りのものではないが、空海が持ち帰ったマンダラがインドの古いマンダラの形式を伝えていることに疑いはない。空海が帰国した後、天台宗の円珍たちもほとんど同じ胎藏マンダラ絵図を持ち帰っていることなどから推しはかるに、八、九世紀の中国ではマンダラを布に描いていたと思われる。

『大日経』のマンダラは仏たちが並ぶ宮殿を平面に、つまり二次元の世界に映そうとするものであって、地面に三次元的な立体造型を作り出そうとするものではなかった。師と弟子の二人は色の付いた絵あるいは粒を落としながら、一晩でマンダラを描くべきだとこの経に述べられている。一晩、二人の作品であれば、それほど精緻なマンダラ図ができあがったとは思えない。夜が明けると、できあがったマンダラの前あるいは中に弟子を導き、師は自分の弟子としての印可を与えたのである。

地面に描かれたマンダラはもともと長期間持続するものとして造られていない。その中に描かれた仏の姿の上に花を載せたりするうちに、色粉で描かれた仏たちの像はくずれてしまう。儀礼が終わる頃までにマンダラ図はかなりの部分が元の像を留めなくなっている。さらに、儀式の中でマンダラ自体が壊される、つまりマンダラを壊す所作が儀礼の中に一つの段階（次第）として組み入れられているのである。マンダラはこのように元来

は儀式の中でのみ用いられるものであり、儀式の後に残るものではないのである。日本では地面にマンダラが描かれることは極めて稀だ。これは儀式の仕方が異なるという原因にもよると考えられる。

七世紀後半頃の編纂と推定される密教経典『金剛頂経』には金剛界マンダラが述べられている。この経典は、地面に描くマンダラではなく、心の中に瞑想するマンダラを主として述べている。後世、『金剛頂経』はヨーガ・タントラのグループに属すると考えられたが、まさにヨーガの行法を中心としたマンダラ儀礼が述べられているのである。

ほとんどのマンダラがそうであるように、金剛界マンダラに登場する諸尊ひとりひとりに特有なシンボルが定められている。例えば、金剛王菩薩のシンボルは鉤である。行者は世界中にあるすべての鉤つまり金剛王を念じ、右手に集める、と思いをこらす。世界中のすべての鉤が自分の手の中に実在するかのような感じになったとき、その鉤を前に差し出す。すると、鉤を持つ金剛王菩薩が行者の前に立つ。顕現した菩薩は消え去ることなくあらかじめ定められた金剛界マンダラの中の定位置に坐す。行者はすぐさま次の尊格の産出にとりかかるのである。このような所作を数十回くり返すならば行者の周囲には仏や菩薩が行者をとりまくことになる。行者は金剛界マンダラの中心に坐っており、行者はこのマンダラの中尊である大日如来と同一視されるのである。

『金剛頂経』においては、大日如来はまだ悟っていない修行中の者と考えられている。一方、彼の四方にいる四人の仏（阿閼、宝生、阿弥陀、不空）はすでに悟りを開いていた仏である。この四人は「すべての如来」と呼ばれるのであるが、ともあれすでに修行の完成した仏たちが大日如来を見守って修行を完成させるというのが金剛界マンダラに表現されたストーリーである。したがって、マンダラは特定の一点における仏・菩薩の状況を表しているのではなく、悟りに至っていないものが悟りに至るまでの修行の階梯、つまり時間の経過をも表現していることもある。

金剛界マンダラの観想において注意すべきことは、マンダラとは行者がその中であって修行するものと考えられていることである。つまり、マンダラはここでは盆のような祭壇でもなく、地面に描かれた儀式の場でもな

く、自分自身がその中に存するいわば三次元的な疑似空間と考えられているのである。

胎藏マンダラとともに空海は中国から金剛界マンダラを持ち帰った。彼が持ち帰った金剛界マンダラは、九つのマンダラが井形に組み合わさったものであるが、これは中国において改めて解釈されたマンダラである。インド、チベット、ネパールにおいて金剛界マンダラと呼ばれるものは一般に空海が持ってきたマンダラの井形の中央の部分に相当する。

八、九世紀になるとインドのマンダラの形態は大きく変化した。それまでは大日如来がマンダラの中心にいたのであるが、この時期以降は、血に満たされた頭蓋骨杯を持ち、蛇を首や腕に飾りとして巻いたり、血のしたたる象の生皮を被ったりしているといった不気味で恐ろしい秘密仏がマンダラの中心に登場するようになる。これは、この時期になるとそれまでの初期・中期大乘仏教が避けて通ってきた血や骨の儀礼、呪術的な要素の強い土着的崇拜などが積極的に後期大乘仏教の一部としての密教の中に取り入れられたことを意味している。

九世紀頃には、須弥山を中心とする世界の構造がマンダラの構造と統一されるようになった。すなわち、仏や菩薩は須弥山の山頂に建てられた宮殿の中に整然と並ぶと考えられるようになったのである。やがてこの須弥山の下には地・水・火・風という世界を構成する四元素が垂直に積み上がっていると考えられる。そして、この地・水・火・風の四元素はマンダラでは四角い宮殿を取り囲むいくつかの同心円によって表現された。このように円形の周縁の中に四門を有する宮殿が描かれるといった今日のチベットやネパールのマンダラの基本的な構造は、一〇世紀から一一世紀にかけて出来あがっていたと考えられる。

一一、一二世紀の学僧アバヤ・カラグプタが編纂したマンダラ集成『完成せるヨーガの環』*Nishpannyogavali*のサンスクリット・テキストが残されている。ここには約三〇種のマンダラの大まかな構造や、登場する神々の名前が述べられている。これによれば、この著作が編纂された時期にはマンダラが二次元の絵図ではなくて、三次元的な構造を持つものとして理解されていることがわかる。この書に述べられたマンダラ世界はバリアに

囲まれた小さな天体に譬えることができる。金剛を敷き詰めた地面のまわりを金剛の環がとりまき、さらに透明の金剛が無数に集まってできた籠（金剛籠）がすっぽりと地面を覆っている。その籠の中に逆三角形の法源すなわち「世界が生まれてくる源泉」が浮かんでいる。この逆三角形の法源の中に地・水・火・風の四元素があり、その上に須弥山がそびえ、さらにその山頂に仏や菩薩の住む宮殿が存在すると考えられた。

一一、一二世紀頃になると仏塔の四面に仏像が彫られるようになった。たとえば、コルカタのインド博物館には四面に仏像を彫り込んだこの頃の仏塔が展示されている。また、サルナートの仏教寺院の遺構でもそのような仏塔を見ることができる。仏塔はしばしば須弥山を象徴すると考えられるので、この四面に仏像が彫られた仏塔は一種の三次元的マンダラの作例、少なくともその原初的な形態と考えることができる。

今日のカトマンドゥ盆地には、仏塔の側面に法界マンダラの諸尊を彫り込んだ仏塔が数多く見られる。このような仏塔とマンダラとの統一体はおそらく近代以降のものと思われるが、マンダラが仏教徒の間で立体的なものであるとも考えられていたことを示すには十分な証左であると思われる。

立体的なマンダラは近代以降のチベットにおいて盛んに作られた。例えば、ポタラ宮殿には精緻でかつ大きな立体マンダラが残されている。北京の紫禁城にある雨花閣にも清の乾隆二〇年（一七五五）に高さ三メートル強の立体マンダラが作られ、今日に残されている。

カトマンドゥ盆地には他の地域には見られないマンダラが見られる。すなわち、須弥山を意味する八角の台の上に右あるいは金属製の円盤が水平に置かれ、その円盤の上にマンダラ図が線刻されている。須弥山台そのものは中国にも見られるのであるが、このような造りのマンダラはカトマンドゥ盆地特有のものと思われる。この盆地には須弥山台の水平の平面にマンダラ図があり、その上に宮殿を形取った四角い立方体が置かれている例もある。

### 三、日本におけるマンダラ

日本においては「マンダラ」（曼荼羅、曼陀羅）という語が、インド、ネパール、チベットにおけるよりもかなり広義かつ曖昧に用いられてきた。インド、ネパールなどにおいては宮殿の中に整然と並ぶ尊格（仏、菩薩、明王など）を宮殿と共に描いた図あるいはその立体モデルをマンダラと呼ぶ。日本においてもマンダラは右に述べたような意味に用いられており、空海が持ち帰った胎藏「界」および金剛界マンダラは、宮殿に並ぶ尊格を描いており、東寺五重の塔の一階内部や東寺講堂の内部を立体マンダラと呼ぶことは可能である。

だが、日本では浄土における阿弥陀仏および彼をとりまく菩薩や天の様子を描いたいわゆる浄土変相図（浄土変）もマンダラの一種と考えられ、浄土曼荼羅と呼ばれてきた。チベットやネパールにも浄土変相図は描かれているが、それはマンダラの一種とは考えられていない。また日本には、浄土曼荼羅の外に寺社曼荼羅と呼ばれるものがある。例えば春日大社の中心となる社を山と共に描いた春日曼荼羅や、熊野神社の様子やこの神社の諸神を描いた熊野曼荼羅が挙げられる。この種のマンダラは、山の中に寺社が散在し、その寺社の外側に諸神が浮かびあがるという構図を有しており、インド、チベットにおけるマンダラとはかなりその構図を違えている。

また日本では一尊格のみが絵図に描かれている場合でもそれを別尊曼荼羅と呼んできた。このような「マンダラ」という語の用い方はインド、チベットなどにはない。このように「曼荼羅」という語の用い方は日本ではインド、チベットに較べてかなり広義かつ曖昧であるが、日本において「曼荼羅」という語のこのような用い方には、すでに千年近い歴史がある。

近年ではさらに、「マンダラ」という語は日常語としても用いられている。「人間マンダラ」「花マンダラ」「恋マンダラ」さらには「テレビ・マンダラ」という語も用いられている。このような場合には、さまざまな要素あるいは項がともかくもひとまとまりにあれば「マンダラ」と呼ばれるのである。その中の要素あるいは項がどのような関係にあるか、それらが将来どのようなようになるかが不明であり、摩訶不思議であるゆえに「マンダラ」

と呼ぶのだと考える日本人は多い。だが、インド、チベットなどにおいてはマンダラの中の諸要素の関係も「将来」も明白に規定されていなければならないのである。

#### 四、マンダラと儀礼

カトマンドウ盆地ではすでに述べたようにさまざまな形態のマンダラが作られているが、儀礼の中では『大目経』に述べられたように地面にマンダラが描かれ、その上に供物としての花、葉、水、ヨーグルトなどが置かれる。例えば、ネパール仏教の師（グル）マンダラの儀礼では僧侶の目の前に直径二〇センチほどの丸が白あるいは赤の砂粒によって描かれるが、これが師マンダラである。この円の中に仏の姿が描かれることはないが、ここが仏や菩薩たちを呼び集めて彼らに供物を捧げる聖なる場となる。二、三〇分もすればこのマンダラは花や葉、水、ヨーグルトなどで覆われてしまい、外見上はそれがマンダラであるとは思えない。

マンダラはまた葬送儀礼にも用いられる。ネパールのネワール仏教徒の間では親族が亡くなると、次の世ではより良い状態に生まれ変わって欲しいという願いを込めて、悪趣清浄マンダラを砂で描いてその死者がかつて住んだ家にしばらくの間置いておくことが多い。チベット仏教徒の間では布に描かれたマンダラの上に遺体をのせて荼毘を行うことがある。

カトマンドウ盆地では、先に述べたような須弥山台の上に置かれた円形のマンダラ盤が一般信者には供養の対象となっている。寺院の境内に置かれたそのようなマンダラ盤には、供物の容器を捧げ持った人々が訪れて、花や米をその上に置いて礼拝していく。しかし密教の専門僧にとっては、マンダラとは元来、観想の補助手段であった。一般信者はマンダラに描かれた仏や菩薩たちに対して供物を捧げることに留まる。一方、専門僧たちは供養の儀式も行うのであるが、精神的に現前に仏や菩薩を密教的なヨーガによって呼び出してその仏たちと一体となろうとする。このような行法を成就法（観想法）という。

このような行法にあつてはヨーガ行者はマンダラの中に自分が入ってい

るとイメージする。すなわち、この場合にはマンダラは平面に描かれた絵図ではなくて、自らのまわりに仏や菩薩が立ち並ぶと表象される三次元的擬似空間である。さらに行者と仏・菩薩たちは門を備えた宮殿の中にいると観想するのである。

#### 五、マンダラの生成と消滅

われわれが一般に見るマンダラには、世界の諸要素を意味する同心円に囲まれた仏たちの住む四角い宮殿が描かれている。これはマンダラが生成の過程を終えて完成にいたった状態を示している。観想法の補助手段としてのマンダラにあつては、マンダラははじめほんの小さな核であり、その核が次第に大きくなり、やがて中心となる仏とその仏が住む宮殿とが形作られるのである。そしてさらに観想が続けられて、いわゆるマンダラ図に見られるような仏の世界が成立するのである。

仏や菩薩が宮殿の中に整然と並ぶ世界が現成すると、次にはその世界を縮小していき、やがてケシ粒ほどの大きさにする。これは、世界が無常であり空であることを体得するための過程である。行者はその小さな粒を自分の身体に呑み込んでしまい、その後は行者は眼前に現われた世界としてのマンダラに関わることなく、自らの心身を舞台としてヨーガを行なう。後世の密教では、マンダラが出現する過程は「マンダラが」生起する次第、「マンダラが呑み込まれた後のヨーガの過程は」「マンダラ瞑想の」完成の次第」と呼ばれてきた。このようにマンダラは瞑想法の前半に関わるものであつて、その後半においてはほとんど無関係である。

#### 六、マンダラの本質

では、マンダラとはようするに何なのか。以上述べてきたようにマンダラは実にさまざまな形態や機能を有してきた。マンダラ千五百年の歴史の中で普遍的なものは何か。マンダラの特質とは「そこに聖なるものの顕現があり、しかも自分の中に入り得る世界であること」である。

初期的なマンダラは携帯用祭壇ともいべきものであったことはすでに述べたが、この場合も「聖なるもの」としての尊格の彫像あるいはシンボルが眼前にあり、しかもその彫像あるいはシンボルの存する場が行者の眼前に設けられている。つまり、聖なるものの顕現と聖なるもののシンボル等が存する場との二つが与えられているのである。さらに、その場には行者あるいは儀礼を行なう者がその中に入ることが可能なのである。後世は、すでに述べたように、その場は須弥山を中心とする世界と考えられた。この世界は行者をもその構成員として含むものである。

行者がマンダラの中に入って諸尊をひとりひとりめぐって歩くと観想することもあれば、行者が自身をマンダラの中尊であると思いつくこともある。マンダラに向かって行者がどのようなかたちの瞑想法を行なうかによって、マンダラの中に行者がどのように入るかが決定されるのである。

行者がマンダラの中の諸尊のひとりひとりをめぐるといふように観想するならば、マンダラは仏たちの住む国あるいは世界であると考えることができよう。一方、行者が自分をマンダラの主尊であると思いつく場合には、行者は世界の中心となる。『金剛頂経』に述べられる金剛界マンダラにおけるように中尊（あるいは行者）が他の尊格を生むのであるから中尊である大日如来（あるいは行者）が最終的には世界そのものとなる。このような場合には、「世界と個我（アートマン）」とが本質的には一体のものである」というインド精神が古代から持ち続けてきたテーゼを後期大乘仏教の一形態としてのマンダラもまた追求したといふことができよう。

後世、マンダラは基体（アーダーラ）とその上に存するもの（アーデーヤ）との複合体と規定された。この場合、基体とは須弥山を中心とする世界（器世間）をいい、基体の上には存するものとは仏、菩薩たちであり、結局は世界に住む人間たち（世間）をいう。もともとマンダラの周縁には行者などが登場することもあるが、原則としてマンダラに登場するメンバーは、仏、菩薩、明王、天などの聖なるものとしての資質をすでに得た者にかぎられる。行者がマンダラの尊格と同一視されるというのは、密教における行法の方法を示しているのであって、マンダラの中尊にこれから修行をしようとしている人間が肖像画のように描かれることはないのである。

今述べた「密教における行法」とは、密教においては「俗なるもの」としての行者がともかくも「聖なるもの」としての資質を得たと仮定して修行を始めることをいう。山登りする際に、ふもとから一步一步頂上に登っていくという方法はとらずに、頂上までヘリコプターで一気に飛んでから下山を経験するようなものである。

このようにマンダラには、悟りを得た仏と仏が住む世界との二つの要素が必要である。世界が宮殿、須弥山、宇宙的蓮華などによって構成されているのは、インド人たちが世界の構造をそのようなものとして理解したことを示し、仏たちが整然と並んでいるのは、修行の過程が明確に言葉で示し得るほど整然とした構造を有していたと考えていたことを示している。以上のように、マンダラは実践者の目標つまり仏を眼前に可視化し、さらにその目標が存する場（世界）に実践者が入ることを許されていることを示すものであった。

多くの人はここで思うことであろう。マンダラは一人の実践者と仏と世界との関係に終始しているのか。実践者が属する社会はどこにあるのか、歴史はどこにいったのか。だが、マンダラに社会はない。歴史があるといっても実践者一人の修行の歴史であって、社会や民族の歴史ではない。ここにマンダラの問題点がある。それはまた仏教思想の問題点でもある。